

何震と幸徳秋水

著者	吉川 榮一
雑誌名	文学部論叢
巻	79
ページ	9-27
発行年	2003-03-20
その他の言語のタイトル	He Zhen and Kohtoku Shusui
URL	http://hdl.handle.net/2298/2753

〔論文〕

何震と幸徳秋水

吉川 榮一

He Zhen and KOHTOKU Shusui

Eiichi YOSHIKAWA

要旨：

何震は、日本において女子復権会を組織し、夫である劉師培とともに機関誌《天義》誌上で女性解放と無政府主義の宣伝に努めた人物である。彼女は、1904年に上海の愛国女学に入学したところから革命思想に触れ、その後1907年に来日したのち幸徳秋水と知り合い、急速に無政府主義に傾倒していった。彼女は、幸徳秋水という稀代の思想家に、ときに反発しつつも、独自の女性解放論を形成しようとする道半ばで挫折していった何震ではあったが、彼女と幸徳との交流は知られざる近代日中文化交流史の1ページであり、幸徳との出会いによって目覚めていく過程は、辛亥革命へと向かう激変期にあった中国人青年の典型としてみることもできるのである。

キーワード：何震、幸徳秋水、女性解放運動、無政府主義

1. 女子復権会の創設

拙稿で取りあげる何震の履歴についてはわからないことが多い。江蘇省儀徴の人と伝えられるのみで、生没年も不明である。何震については独立した伝記はなく、夫である劉師培について書かれたものを通してわずかに知ることができるだけである。彼女が歴史の舞台に登場するのは、1904年6月、同郷の劉師培と結婚したのち、1907年初めに夫とともに来日したあとの数年間に過ぎない¹⁾。彼女の活動の舞台は、明治末の東京であった。

1907年6月、何震は東京で「女子復権会」を組織し、その機関誌として《天義》を創刊した。福田英子が編集していた《世界婦人》は、何震らの活動を次のように紹介している。

日本に在留せる清国革命派の青年中、今回「女子復権会」なる者を起こし、雑誌《天義報》を発刊せる者あり。《天義報》は、「固有の社会を破壊し、人類の平等を実行するを以て趣旨と爲し、女界革命を提唱するの外に於て兼て、種族、政治、経済、諸革命を提唱す」と宣言し、「女子復権会」は左の「簡章」を発表せり。(以下略)²⁾

《世界婦人》は、女子復権会の「簡章」を詳しく紹介しているが、それによれば会の「宗旨」は「女子世界に対する天職を確し、数千載重男輕女の風を力挽す」であり、その「辨法」としては、女性問題については「暴力を以て男子を強制す」「压抑を甘受せる女子に干渉す」の二法、世界に対しては「暴力を以て社会を破壊す」「主治者及び資本家に反対す」の二法を挙げている。現実に女子復権会がどの程度活動していたかについては疑問があり、小野和子氏は「機関誌《天義》を発行して男子に対する復讐を鼓吹することが、その活動の全て」であったと評している³⁾。しかし、当時日本に留学していた中国女性の多くから共感を持って迎えられていたことは確かであり、鮑家麟氏は、「東京で復権会に加入していた留日女学生は百名前後に達し、何震の影響の大きさがわかる」と説いている⁴⁾。もっとも、鮑氏の掲げる人数は、当時の女子留学生の総数から考えて、多く見積もりすぎていると思われるが⁵⁾、《天義》報社に寄付金を寄せてきた女性は最初の二ヶ月余りだけで18人に上っており、それなりの拡がりを感じさせる。寄付金を寄せた者の中には、何香凝、唐群英、方君瑛ら著名な同盟会員のほか、周怒濤、呉亜男ら何震の同窓である愛国女学出身者たちも名を連ねている⁶⁾。こうした賛同者に、《天義》発起人たる5人の女性を加えると、やはりかなりの女性が女子復権会に関わりをもっていたことは明らかである。前年夏に設立された「中国留日女学生会」の幹事10名のうち少なくとも3人が寄付金を寄せていることから窺えるように、恐らく当時の多くの中国女子留学生は重複して複数の組織に参加していたのであろう⁷⁾。いずれにせよ、日本在住の少なからぬ進歩的中国人女性は何震らの活動を支持していたことには疑いの余地はない。

さて、上述の「簡章」は、《天義》創刊当時の、何震その人の女性解放論

の性格をも表すものである。「簡章」に述べられている主張を要約すれば、「今日の社会は男性中心の女性蔑視の社会であり、女性は支配者・資本家たる男性に抑圧されている。それゆえ、かかる社会は破壊し、支配者・資本家どもは放逐せねばならぬ」ということである。「女子復権会」という名の通り、喪失した女性の権利を回復しようという何震の意気込みのほどがよく表されている。それは当時の《世界婦人》編集者にも感じられたとみえ、差別的な表現ながら、「さすがは支那人とて随分をかしき節もあり、又たやすく賛成し得ざる箇条もあれど、兎にかく其の意気の壮なる、日本人中には到底見得べかざる者あり」と評している⁹⁾。

この女子復権会の機関誌が《天義》であった。《天義》は、1907年6月、何震、陸恢権、張旭、周大鴻、徐亜尊の5人の女性を発起人として創刊されたが、実際に主導権を握っていたのは何震・劉師培の夫婦であり、二人が1908年に日本に離れるとともに、《天義》は第十九期をもって停刊したようである⁹⁾。先に述べたとおり、《天義》は女子復権会の機関誌であるから、現状を打破し、人類の平等を実現することを究極の目的として創刊されたのであるが、《天義》に先立って発行されていた《復報》に掲載された「天義報啓」は、《天義》の目指す方向をよく表している。

民族主義や社会主義が唱えられて以来、「種族革命」「政治革命」「経済革命」が人民の天賦の権利となったが、不公平不平等を根絶するためには、「女界革命」「男女革命」が不可欠である。「男女革命」と種族・政治・経済の諸革命を同時に行わなければ、真の公平は得られないのだ¹⁰⁾。

なるほど、男女間の差別が解消されない限り、人間の真の解放はありえないという《天義》の主張は、現代の女性解放運動の先駆けとも言うべきものであり、この主張実現のために女子復権会があり、《天義》の創刊があるのだというわけである。このように、《天義》はその出発点においては、あくまで女性解放の提唱を最大の目標としていた。当時、何震らの活動を知った幸徳秋水も、その点に着目して《天義》をこう評している。

支那の婦人何震氏等、近日雑誌「天義報」を発行す、男女同権の説を主張し、且つ政治的及社会的革命を鼓吹する處、單に滿洲排斥を事とする革命党青年と頗る其選を異にす、支那婦人の前途決して悔る可からざる也。

何女史一日書を寄せて曰く、「貴国の女界素と文明と称す、何ぞ男女平等の思想、必ず男子に頼て之が提唱を為すや」云々と、嗚呼僕之に対して何をか答ふべき、借問す文明の教養ある日本婦人諸君亦此語に対して果して何をか答へんとするや¹¹⁾。

幸徳秋水は、単なる排滿運動にとどまらざるものとして何震らの活動の方向を高く評価し、女性自身の手により男女平等を勝ちとらんとする何震の意気軒昂ぶりを讀んでいると見て良いだろう。

しかしながら、やがて何震・劉師培の無政府主義への傾斜が著しくなるにしたがって、《天義》は女性解放を唱える雑誌というより、無政府主義の宣伝誌としての性格を強めていった。今日残っている《天義》第八・九・十期合冊号では、「宗旨」が次のように変更されている。

国界種界を破除し世界主義を実行する。世界の一切の強權に抵抗する。現在の全ての政治を顛覆する。共產制度を実行する。男女の絶対的平等を実行する¹²⁾。

すなわち、強權に対する抵抗や政府の転覆といった無政府主義的色彩の濃い主張に重点が移り、男女平等は第五項目へと後退している。後述するように、これは何震・劉師培が、幸徳秋水ら日本の無政府主義者たちと接触する過程でその影響を強く受けた結果でもあるが、当時の中国人青年の無政府主義に対する関心の高まりの反映でもある¹³⁾。そしてまた、《天義》の無政府主義への傾斜が、当時の留日学生の無政府主義に対する関心にさらに拍車をかけることにもなった。

こうした《天義》の性格の変化に伴って、読者層も当然変化していった。

《天義》の財政を支えた釀金者が第六期まではほとんどが女性であったものが（22人中18人）、第八・九・十期合冊号からは男性のみになっていることからそれは窺える¹⁴⁾。無政府主義中心の内容は、女性読者には必ずしも喜ばれなかったに違いない。

さて、以上のように性格を変えていった《天義》ではあったが、《天義》の看板ともいべき論説は、そのほとんどが劉師培と何震によって書かれていた状況には変化はない。正・続をそれぞれ一編として数えた場合、今日わかっている限りでは、《天義》に掲載された女性解放問題を論じた論説12篇のうち、10篇は何震の手によるものである¹⁵⁾。劉師培が主として無政府主義について論じ、何震は専ら女性解放問題を扱っているのであるが、何震もまた無政府主義への傾倒を憚ることなく表明している。1908年8月末に発行された《天義》誌上において、「私は一切の学術に対して甚だ懐疑的であり、ただ無政府主義だけを信奉している」と言い切っているのである¹⁶⁾。この事実からもわかるとおり、何震が《天義》誌上で展開した女性解放論は、無政府主義と密接に結びついたものなのであった。そして、彼女の無政府主義への傾倒には幸徳秋水が深く関わっているのであるが、幸徳との関係に触れる前に、何震がどのようにして無政府主義思想を受け容れていったのかを明らかにしなければなるまい。

2. 何震の思想形成

すでに述べたとおり、何震の名が歴史に登場するのは、同郷の劉師培と結婚してからであるが、結婚当時彼女が何歳であったのかを伝える史料はない。ただ、何震の親戚で劉師培の「姻弟」にあたる汪公権が劉と同年輩であったことや、当時の結婚習慣から推して、劉師培より少し年長ではなかったかと思われる¹⁷⁾。また、孫伯醇氏の伝える「民報社でね、夫婦げんかすると、道ばたのミゾにつつまれて、そこでアーンと泣くんです、劉師培のほうが。」というエピソードから想像されるのも、劉より少し年長の女性である¹⁸⁾。劉は1884年生まれであるから、上海に出てきた頃の何震は二十歳前後か二十歳台前半だったのではあるまいか。

さて、何震が上海に現れた前年の1903年は、清末革命運動において一つの

転機といつていいほど重要な意味を持っている。革命運動の潮流が、改良主義的な変革運動から排満革命運動へと転化した年だからである。拒俄義勇隊運動が挫折し、もはや清朝に対する幻想も失われ、排満革命を唱える軍国民教育会が東京と上海において結成されたのがこの年である。「全国の各種新聞雑誌（主として各地の日本留學生が日本で発行したもの——原注）が、穏和から激烈へ、改良から革命へと変わったのがこの年であり、鄒容・章太炎の著名な革命論が発表され、一世を震撼させた蘇報事件が起こったのがこの年であり、影響のきわめて大きな陳天華の小冊子が生まれたのもこの年であった。」¹⁹⁾1903年当時の上海の状況を、呉玉章は次のように回想している。

上海滞在のわずか十数日のあいだに、私の得た収穫は大きかった。それまで康有為と梁啓超の改良主義的思想しか知らなかったが、上海に来て、はじめて孫中山・章太炎の資産階級革命の宣伝に触れた。よくはわからなかったが、ちょっと比べただけでも、かれらの宣伝は、康、梁よりずっと革命の道理が備わっていると思った。その結果、私の康、梁への信仰は一挙に消え去ってしまった²⁰⁾。

すなわち、改良主義的運動が、清朝打倒に向けた革命運動に大きく転換を遂げつつあった上海に、「接したばかりの革命思想に熱中」²¹⁾していた劉師培に連れられて、何震は足を踏み入れたのである。また、当時の上海は外国文化との接点であり、欧米諸国の中国進出の拠点でもあったわけであるが、それは革命運動にとっても有利な条件を準備するものであった。欧米諸国の侵略の象徴とも言える租界を例にとってみれば、1845年には830畝（1畝は約6.7アール）にすぎなかった共同租界は、1899年には33503畝に拡大しており、こうした清朝の支配の及ばない特殊な地域が上海には広がっていたからである²²⁾。上海のこうした特殊な条件は、変革を志す人々に絶好の活動の場を提供するところとなり、東京とともに革命運動そして女性解放運動の中心地となっていたのである。

女性解放運動について言えば、上海が当時の中国で女学校が最も発達した場所であったことを見逃すわけにはいかない。早くも1897年には、戊戌六君

子の一人である康広仁が「女学堂」を上海に創設しており、1901年頃には、私設の女学校が「雨後の筍のように到るところに数多く生まれていた」のである²³⁾。これらの女学校の中でも、呉徳芝（懷久）の創設した務本女学と蔡元培らの創設した愛国女学は、「私立女学校の紀元を開いたものであり、……教育課程が完備しており教授法がしっかりしていた」²⁴⁾。上海にやってきた何震が入学したのはこの愛国女学であり、それは彼女の人生の転機となった。

愛国女学は、1902年秋、蔡元培、蔣観雲らによって開かれた女学校であり、中国教育会が運営にあたっていた²⁵⁾。初めは、発起人たちの妻や娘の教育のためであったが、やがて同じく中国教育会経営の愛国学社の社員の身内の女性に加わり、次第に学生数を増していった。開校当時『選報』に発表された「愛国女学校開辦簡章」によれば²⁶⁾、「女子を教育しその普通知識を増進し、その権利義務の観念を激発することをもって宗旨とす」とあるだけだが、開校当初には革命運動のための秘密機関的性格を有していた。

本校開校時は、清朝末年であり、革命的性質を有していた²⁷⁾。

1906、7年頃、愛国女学校は学生数が多くなり、同時に江南財政局及び上海道署から補助金を受けるようになったため、学校の性質は次第に革命組織の秘密機関との関係を離脱し、純粋な教育事業になっていった²⁸⁾。

愛国女学の経営母体である中国教育会の中心人物であり、創立当時の校長として愛国女学の教育方針を大きく左右する立場にあった蔡元培は、革命には暴動と暗殺の二つの手段があるだけだと考えていた。彼の考えでは、「暗殺は女子により適しており、愛国女学において暗殺の種を蒔くつもりであった」²⁹⁾。したがって、その教育は「決して良妻賢母主義を採用せず、虚無党派の女子を育成する」ことを目的とし、「年長者のクラスではフランス革命史、ロシア虚無党主義などを講じ、（爆弾製造のため——引用者註）化学を特に重視した」ものであった³⁰⁾。

何震は、まさにこのような教育環境に身を置いていたのである。そのうえ、

夫の劉師培は革命思想に熱中し、蔡元培らの主宰していた《警鐘日報》の編集者の一人として革命思想の鼓吹に努める一方、実際の暗殺にも手を貸していたのであるから、何震も次第に革命思想に染められていったであろうことは想像に難くない³¹⁾。

さて、1903年前後は、無政府主義思想が中国に受容され始めた時期でもあった。このころ中国に紹介された無政府主義は、西欧近代の自由・平等などの観念を前提として、それをさらに拡大しようとする思想の一つとしてではなく、ツァー専制統治の打倒に立ち上がったロシア虚無党の指導理念としてである。日本の場合と同様に、ニヒリズム——テロリズム——アナキズムが、同一の系譜にあるものとして受け容れられたのであり、とりわけテロリズムと結びついて、当時の中国人青年の共感呼び起こした。前述の如く、何震は愛国女学でロシア虚無党史などを学び、暗殺主義の洗礼を受けていたのであるから、来日以前の上海滞在中すでに無政府主義に傾く素地はできていたと言える。しかも、彼女の周囲にいた人々の中には、無政府主義の先駆的紹介者が少なくなかった。例えば、のちに何震と親しく往来するようになる蘇曼殊は、女性無政府主義者エマ・ゴールドマンを紹介した「女傑郭耳曼」^{ゴールドマン}（《国民日報》1903年10月7、8、12日）を発表しているし、劉師培の友人となる国学者馬叙倫は、無政府主義・暗殺主義を礼賛する「二十世紀之新主義」（《政芸通報》第14～16号、1903年8～9月）を書いている³²⁾。また、同じく劉の友人である張継が『無政府主義』を訳出したのもまた1903年であった。このほか、冷血（陳冷）訳『虚無党』（1904年）、金一（金天翮）『自由血』（1904年）、江西一青氏『虚無党女英雄』（1905年）など、ロシア虚無党を紹介する少なからぬ書物が当時刊行されていたのである³³⁾。

とりわけ、金一『自由血』は、革命を志す中国青年にテロリズムと結びついた無政府主義を伝える上で大きな役割を果たした書物であるが、これは煙山専太郎の『近世無政府主義』（1902年4月）の翻訳である。前出の張継訳『無政府主義』（1903年）もまた同著の翻訳であるとされているが³⁴⁾、原著は日本においても大きな影響力を持ち、幸徳秋水も愛読者であったといわれ、また大逆事件で処刑された宮下太吉は、煙山のこの書に触発されて天皇暗殺を思い立ったとも伝えられている³⁵⁾。一方、中国においても、呉稚が自分の

思想を一変させた書物の一つとして、『自由血』を挙げている³⁶⁾。このように、ロシア虚無党を紹介した書物は、当時の革命を志す青年たちに絶大な影響力を持っていたのである。

何震が果たして『自由血』を眼にしていたかどうか史料は何も伝えていないが、夫・劉師培も関わっていた《警鐘日報》にたびたび広告の出ていた同書を手にする機会は充分あったと考えられる。さらに、著者である「愛自由者金一」こと金天翮は、女性解放を革命運動と結びつけて説き、「女性が奴隸的地位を脱して本来の自己に戻ることを求め」「女性が革命に従事するよう鼓吹した」『女界鐘』（1903年・上海）の著者でもある³⁷⁾。そのうえ金天翮は、中国教育会の会員の一人でもあったから、愛国女学にいた何震が金の著作を知る機会は小さくなくはずである³⁸⁾。かりに耳学問的なものに過ぎないにしても、女性革命家養成を目指す愛国女学に学んでいた彼女が、無政府主義について何らかの知識を得ていたと考えたほうが自然であろう。彼女の無政府主義信奉は、来日後の幸徳秋水との交流によって確固たるものになっていくのであるが、上海時代にすでにその萌芽は培われていたと言えるのである。

3. 何震と幸徳秋水

1907年の2月か3月（旧暦正月）、前年すでに来日していた章炳麟の招きに応じた劉師培に伴われて何震は日本の地を踏んだ³⁹⁾。何震が、これまでの何班から何震に名を改めたのはこのころである⁴⁰⁾。

坂本清馬氏の回想によれば、何震が夫・劉師培や章炳麟とともに初めて幸徳秋水を訪ねたのは、この年の4月のことであった⁴¹⁾。案内役の張継は、前述のとおり早くから無政府主義を知る人物であったが、来日後、北一輝の紹介で幸徳と行き来をするようになってからは、なおいっそう無政府主義を深く信奉するようになっていった。北一輝は「不肖の幸徳秋水氏に介せるが禍して張君の思想は意外にも無政府主義に奔逸し……」と記しているが⁴²⁾、張継自身も「幸徳秋水・大杉榮・堺利彦らと交際するようになり、とりわけ秋水の學問に佩服した」と記している⁴³⁾。おそらくこの時の訪問は、自分の心酔する日本人革命家・幸徳秋水を同志に紹介しようとしたものであろう。当

時、張継は《民報》編集者の一人として民報社に足繁く通ってきていたから、かねてより何震・劉師培夫婦に幸徳秋水の「学問」——すなわち無政府主義思想について語っていたに相違あるまい。

さて、社会主義、無政府主義について幸徳からじかに話を聞いた何震ら夫婦はどのような感想をいだいたのであろう。同じころ幸徳の演説を初めて聴いた別の中国人留学生は、「おだやかな表情のなかに強い気性を帯び、一見して革命の大人物であることがわかり、自然に敬服の念を起こさ」しむるような「日本の傑出した人物といったところ」と、幸徳の印象を語っているが、おそらく何震らも忽ち幸徳に心酔したのではあるまいか⁴³⁾。前節で紹介したとおり、何震は上海愛国女学時代にすでに「虚無党」に関する知識を持っていた可能性が高い。あるいは幸徳についても、上海時代からその名を耳にしていたかも知れない。早くも1902年に幸徳秋水の『二十世紀の怪物 帝国主義』と『長広舌』（中訳名『広長舌』）が上海で翻訳刊行され、先に触れた呉稚樞の思想を一変させた書物の一つがはかならぬ『広長舌』でもあった⁴⁴⁾。革命を志す中国人青年から日本の社会主義運動・無政府主義運動の首唱者として尊敬を集めていた幸徳秋水と直接会って話をするのできた何震は、この革命の先達から最新の知識を吸収しようと考えたに違いない。

もっとも、何震は幸徳秋水の意見をそのまま唯々諾々と聞いていたわけではない。「初婚の女を以て男子の継室と為るを得ず」という女子復権会の「規律」をめぐることは、幸徳秋水と何震の間に論争が生じている。《天義》第一期に掲載された「女子宣布書」中の「初婚の女性はず初婚の男性に嫁ぎ、再婚の女性はず再婚の男性に嫁ぐべし」という何震の見解に、幸徳秋水が異論を唱えたのである⁴⁵⁾。彼は、「女子宣布書」は「議論雄大」で「敬服の至り」であるが、結婚についての見解は「僕の解する所ではなく」、「夫婦関係の第一要件は男女の相思相愛の情にあり」として、次のように主張した。

夫婦共に住みて家をなすがとき現時の所謂結婚制度は、将来の自由の社会において、亦必ずしも必要の事となさず候。蓋し小生は最も淫佚を惡むものに候。又偽道德のため人生の愛情を束縛するものにたいし

てはさらにその害ありと認むるものに候⁴⁷⁾。

これは全く彼の屁理屈的自己弁護のようなものである。なぜなら、幸徳秋水は名だたる放蕩鬼であり、むしろ「最も淫佚を愛した者」であるからである。初めの二度の結婚では、二度とも祝言の晩に登楼するという常軌を逸した破廉恥漢であり、その後も同志の妹に手を付けたかと思えば、妻千代子を追い出して強引に菅野スガと結婚する始末であった⁴⁸⁾。なるほど、夫婦が同居する「現時の所謂結婚制度」は彼には不都合であったし、初婚の女性は初婚の男性に嫁ぐという考え方は、到底受け入れられなかったに違いない。

何震は、幸徳のもっともらしい反論を知るや、直ちに幸徳宅に乗り込み、居合わせた堺利彦と幸徳の二人を相手に議論を交わした。何震がどこまで幸徳の「男のエゴ」を見抜いたのかは不明であるが、結局議論は並行して意見の一致を見ることはなかった。「幸徳君及び堺君の考えは人類の完全な自由の実行にあり、私の考えは人類の完全な平等を実行するにあり、立脚点がやや異なる」のだと、あくまで自説を堅持しつつ矛を納めている⁴⁹⁾。

余談ながら、やがて何震自身も幸徳流の「愛情第一主義者」に変じてしまったのはいかなることであろうか。何震は、親戚筋の汪公樞と「夫婦気取りで、公夫公妻と宣言してはばからなかった」と言う⁵⁰⁾。いやしくも女子復権の旗手たらんと欲するならば、何震は断固として「愛情第一主義」の虚偽を暴き、「男女の絶対平等」を実行するために地道な活動が続けるべきであった。やや先走りして言うなら、こうした軽佻浮薄な一面が何震の欠点であり、彼女の活動を打ち上げ花火的なものに終わらしめた原因の一つなのである。

さて、《天義》に徴すれば、何震と幸徳は一再ならず手紙のやりとりをしたり、何震が幸徳宅を訪問したりしている⁵¹⁾。また、1907年8月には、劉師培・張継らとともに幸徳を講師に招いて「社会主義講習会」を開催するなど関係を深めている⁵²⁾。やがて、何震が《天義》に発表する論文にも、次第に幸徳の影響が強く表れるようになっていった。その顕著な例を、女性解放を論じた彼女の代表的論文の一つ「女子解放問題」に見ることができる。

数千年来の世界は、人治の世界、階級制度の世界であり、すなわち世

界は男性の独占する世界であった。今もしその悪弊を除こうとするならば、人治をことごとく廃絶して人類の平等を実現し、世界を男女共有の世界に変えねばならない。そして、この目的を達するには、まず女性の解放から始めなければならない⁵³⁾。

人類平等の世界を実現するためには男女平等が前提条件であり、そのためにこそ女性解放が緊要であると説き起こすこの論文の眼目は、男性による女性解放運動を否定し、「女権の伸長は女性の闘いによるべきであって、男性から与えられるものであってはならず、……中略……女性が解放の幸福を得るには、女性自身がこれを求めなければならぬ」ということである⁵⁴⁾。では、彼女の言う「女性の闘い」とはいかなるものをイメージしていたのであろうか。「女子解放問題」の結論部分で、何震は次のように述べている。

以上を要約すれば、婦人解放の問題は、婦人をして一人残らず解放を享受せしめるものでなければならない。現在、解放論を主張している者は、第一に女性が職業をもって独立すること、第二に参政権の男女平等を唱えている。……中略……（女性全体が職業を求めれば）今日の経済社会の組織は少数の富民が独占しているのであるから、平民の失業者はいっそう増加することになるだろう。……中略……職業的独立とは職業という形で他人に労役を供することの異名に過ぎない。自由、解放など、どうして獲得できようか。したがって職業をもって独立すれば女性は解放されるというよりは、共産を実行してこそ婦人は解放されるというべきである。……中略……（男女の参政権が同等になったとしても）政治に参与する少数の女性が支配的地位につき、権利をもたぬ多数の女性はその支配を受けることになって、男女不平等のうえに、さらに女性社会のなかにも不平等な階級差別を生ずるのである。……中略……したがって、現在の女性は、男性と権利を争うよりも、人治を完全に覆して男性にはその特権をことごとく放棄させ女性と平等たらしめ、この世界から支配される女性をなくすとともに支配される男性をもなくすべきである。これこそ女性の解放であり、これこそ根本の改革である⁵⁵⁾。

何震は、中国女性が当時置かれていた状況を離れて、言わば未来を先取りした形で参政権運動に反対し、男女の絶対的平等を訴えているわけである。しかしながら実は、「女子解放問題」のうち、中国における女性の地位について叙述した前半部分は何震自身の思想を反映したものではあるが、後半部分は彼女の「独創」とは言えないものであった。《世界婦人》に掲載された「世界婦人の新教訓」（第12号、1907年6月15日）および「海外時事」欄の「^{ノルウェー}那威と女子選挙権」（同紙第16号、1907年9月1日）から得た知識に、幸徳秋水の「婦人解放と社会主義」（同紙第16号）の理論を結びつけたものにほかならないからである。幸徳秋水は「婦人解放と社会主義」のなかでこう述べている。

婦人をして選挙権を得さしめ参政権を得さしめなば、婦人は解放さるべしと説くものあり。……中略……或少数政治家が之に依りて勢利を掴むが如く、或る少数の婦人も之に依りて勢利を掴むべき機会に接するを得べし、而も政治は決して労働者全体を解放し能はざるが如く、また婦人全体を解放し得るものにあらず。……中略……職業の独立を得せしむれば、婦人は解放さるべしと説くものあり。……中略……今日の如き自由競争の激烈なる経済組織其儘にては、職業の独立てふことは、残酷なる悲劇を意味するものにして、多数婦人の堪え得ざる所なり、否な少数婦人の成功者と雖も、永久に其地位を維持し得んことは覚束なし。……中略……人は自己のみ独り自由を得可きものに非ず、万人皆な俱に自由なるを得たる暁に於て、初めて完全なる自由を享受し得べし。……中略……故に一人の婦人の解放は、必ず万人の婦人の解放に伴はざる可らず。……中略……社会主義は婦人解放の唯一手段なり³⁰。

両者を比べてみればわかるとおり、職業的自立や婦人参政権の獲得を否定する何震の主張は、幸徳の「婦人解放と社会主義」と大きく重なっている。幸徳の論文が発表されたのは1907年9月1日付の《世界婦人》第16号であり、いっぽう何震の「女子解放問題」は、9月15日付の《天義》第七期と10月30

日付の《天義》第八・九・十期合冊号である。要するに何震は、幸徳の立論を下敷きにして自分の主張を展開しているのである。ただ、幸徳論文中にあるエマ・ゴールドマンについて何震が全く触れていないことは注目に値する。幸徳は、「米国無政府党の領袖エンマゴールドマン女史」の論文「婦人解放の悲劇」を引用して次のように記している。

ゴールドマン女史は亦謂らく、今日激賞せらるる「独立」なるものは、所詮婦人の天性たる恋愛的本能、慈母的本能を漸次に麻痺し萎縮し去るものなりと、然り、婦人の天性は戦闘競争に非ずして、恋愛なり、慈愛なり、婦人は恋せずして活くるものに非ず、子なくして活くるものに非ず、恋なく子なき婦人は、肉体に生くるも既に精神に死せるなり、如何に其職業の独立を得るも、恋なく子なく精神的に全く婦人の天性を喪失し去らば、之を解放を得たりといふを得べけんや⁵⁷⁾。

エマ・ゴールドマンは幸徳が尊敬していた著名な女性無政府主義者であるが、何震はほかのどの論文においてもゴールドマンについては一切触れていない。「恋愛的本能」や「慈母的本能」が女性の天性だと説くようなゴールドマンの主張は、革命運動のただ中にあった何震には受け入れがたいものであったに相違ない。すでに触れたとおり、来日前の何震が学んだ愛国女学は元来、女性を暗殺者として育てていこうという趣旨を秘めた学校であり、彼女自身暗殺主義に対する強いこだわりをもっていた。第一回社会主義講習会で、発言に立った何震は次のように述べている。

無政府の目的は、人類平等であって、如何なる人にも特権はないのである。男女平等は、人類平等の一端に係わり、女子が平等を争うのは、特権に抵抗する一端に係わるのである。平和と解放とは相背反するものではなく、特に無政府主義は、ただ空言を待むものではなく、尤も実行を重んずるものである。現代世界で無政府党は、露国を以って最盛とする。露国無政府党は、その進歩を三時期に分つ。第一期は言論の時代であり、第二期は運動の時代であり、第三期は暗殺の時代である。今中国

で無政府を實行しようと思うならば、以上三事は、同時に並行して實行すべきである。蓋し今日、無政府革命を實行しようと思うならば、必ず暗殺を以て首務となすべきである⁵⁸⁾。

少なくとも、このころの何震はまだ暗殺主義を堅持しており、幸徳の説くような「婦人の天性は戦闘競争に非ずして、恋愛なり、慈愛なり」などという言葉は、何震には全くお門違いなものに感じられたに相違ない。確かに何震には、新しい知識や理論に接すると、それが現実に応用可能か否かをあまり考えずに受け容れてしまう嫌いがある。しかしながら、100パーセントそのまま鵜呑みにするのではなく、他者の主張を選択的に自説に取り入れていこうとする姿勢は貫かれているといつてよいであろう。

「女子解放問題」に幸徳秋水の影響が色濃いように、彼女の「女子非軍備主義論」（《天義》第十一・十二期合冊号）は大杉榮の影響で執筆されたものであるが、その中にも何震独自の視点は維持されている。竹内善作氏の回想によれば、第三回社会主義講習会に講師として招かれた大杉榮は、「非軍備主義に関したものであって主としてフランスのエルヴェの反軍国主義運動を述べ、それに関連して宗教的な非軍備主義運動などにも及んだ」講演を行っている⁵⁹⁾。大杉の詳しい講演内容は不明であるが、1908年2月20日付けの《日本平民新聞》に掲載された「非軍備主義運動」が参考になる⁶⁰⁾。何震の「女子非軍備主義論」では、第二段落でエルヴェ（愛爾威）の非軍備主義運動について触れ、第三段落には革命時のバリケード作りについての記述や軍人も平民の一員だという記述があるが、これらは大杉論文とほとんど同内容である。しかしながら、幸徳秋水の主張を全て取り入れたわけではなかったように、大杉の「非軍備主義運動」が女性との関係について触れていないのに対して、何震は戦争と女性との関わりに中心を置いて立論している。また、日本の台湾侵略、フランスのベトナム侵略など、アジアの植民地化に対する関心は、大杉の論文には見られないものである。すなわち、何震は幸徳秋水らを通して、日本の革命運動の最先端の思想や知識を主体的に選び取り咀嚼しつつ、中国で紹介していこうとしていたと見るのできるのである。

結びに代えて

《天義》を舞台とした何震の日本における活動は、1908年3月の《天義》停刊をもって終止符が打たれ、この年10月劉師培とともに日本を去るにいたって幸徳秋水との関係も断たれたようである。帰国後の何震は、無政府主義運動・女性解放運動の旗手としてではなく、夫・劉師培をそそのかし革命を裏切らせた「毒婦」として悲惨な後半生を送ることになる⁶¹⁾。彼女にとって、1907年春から1908年秋までの一年半の日本滞在期間が、凝縮された最も輝かしい時間であった。

何震について、その思想的未成熟や現実からの遊離などをあげつらうことはたやすい。しかし、一人の無名の中国女性が時代の激動のなかで目覚め、幸徳秋水という稀代の思想家に出会い、無政府主義を信奉するに到る過程は、劇的な思想的転形期にあった当時の中国人青年の一典型として見ることも可能であろう。竹内善作氏は、「係累の少い、そして神経の新たなものと申しましょくか感受性の鋭敏な連中が秋水の論議に魅力を感じておった。それと同じことがやはり中国の革命党にも言われるかと思えます。」と語っているが、何震こそはまさにその一人なのであった⁶²⁾。

注

(1) 劉師培は、字を申叔といい、革命運動に参加していた頃は専ら光漢と名乗っていた。彼は国学者としてよく知られていた。劉師培、何震については、以下の諸論文を参照した。丸山松幸「劉師培略伝初稿」、《人文科学紀要》第55輯。同「清末無政府主義と伝統思想」、《理想》464号、1972年1月。同「中国における無政府主義と民族主義・共産主義」、季刊《社会思想》2-2、1972年。同「劉師培をめぐる人々」、《中国古典文学大系・月報》、47～49号、平凡社。小野川秀美「劉師培と無政府主義」、「清末政治思想研究」、みすず書房、1969年。R. A. スカラビーノ、G. T. ユー著、丸山松幸訳『中国のアナキズム運動』、紀伊國屋書店、1970年。森時彦「民族主義と無政府主義」、小野川秀美・島田虔次編『辛亥革命の研究』、筑摩書房、1978年。有田和夫「清末におけるアナキズム」、《東方学》第三十輯。なお、何震と劉師培が結婚した年については、従来1903年とされてきたが、嵯峨隆「近代中国の革命幻想——劉師培の思想と生涯」(研文出版、1996年)によれば、1904年6月であったという(同書54頁)。

(2) 「内外時事 女子復権会」、《世界婦人》第13号、明治40年7月1日。『明治社会主義史料集(別冊)Ⅰ 世界婦人』、明治文献資料刊行会、1961年復刻。

(3) 小野和子「中国女性史」、95頁、平凡社、1978年。

(4) 鮑家麟「辛亥革命時期的婦女思想」、鮑家麟編『中国婦女史論集』、290頁。牧童出版社、1979年、台北。

(5) 煥石「留日女学界近時記」(『中国新女界雑誌』第一期。明治40年2月5日、中国新女界雑誌)。

- 誌社。幼獅文化事業公司（台湾）、1977年復刻版）及びさねとうけいしゅう『増補 中国人日本留学史』（くろしお出版、1970年）によれば、当時東京にいた女子留学生の総数は百人未満である。
- (6) 《天義》第三期、第五期、第六期の「本社捐助金芳名」による。「中国資料叢書 6 中国初期社会主義文献集② 天義」、大安、1966年復刻。なお、同書は、一、二、四期を欠いている。
- (7) 前掲、煉石「留日女学界近時記」（前掲『中国新女界雑誌』第一期、第二期）。なお、「中国留日女学生会」設立当時の参加者総数は七十人余りであった。
- (8) 註(2)に同じ。
- (9) 復刻版《天義》によれば、同誌は、劉師培・何震の離日とはほぼ時を同じくして第十九期をもって終わっている。
- (10) 《復報》第十期、1907年7月。「辛亥革命前十年間時論選集」第二卷下冊、818～20頁、生活・読書・新知三聯書店、1963年初版、1978年版。なお、《復報》は、1906年5月に田桐・柳蓮子によって創刊された雑誌である。
- (11) 幸徳秋水「水滸漫」、原載「大阪平民新聞」四号、明治40年7月15日。「幸徳秋水全集」（明治文献、1968年）320～23頁。
- (12) 前掲、復刻版《天義》第八・九・十合冊号。
- (13) Martin Bernal "Chinese Socialism to 1907", Cornell University Press、1976年。198～226頁。ちなみに、《天義》とはほぼ同時期に、李石曾、張靜江、褚民誼、吳稚暉らによってパリで創刊された週刊誌《新世紀》もまた無政府主義の宣伝に努めており、同誌が当時の中国人青年に与えた影響も小さくなかった。
- (14) 前掲、復刻版《天義》による、なお、第七期は同書に収められていないので不明である。
- (15) 今日見ることのできる《天義》から知りうる限りでは、合わせて二十四篇の論説が存在し、そのうち十篇が何震、八篇が劉師培、二人の合作が一篇となっている。
- (16) 「社会主義講習会記事」；《天義》第六期。
- (17) 明治42年（1908年）12月12日付け讀賣新聞「暗殺事件の真相」に「汪公権は最も注目される一人なるが、同人は年齢二十四歳にて……」とあり、これが満年齢であれば劉師培と同年齢、数えであれば劉より少し年下ということになる。
- (18) 孫伯醇「ある中国人の回想」、東京美術、1969年。
- (19) 李澤厚「二十世紀初中国資産階級革命派思想論綱」、《歴史研究》1979年第6期、7頁。
- (20) 吳玉章「從甲午戰爭前後到辛亥革命前後的回憶」；同著『辛亥革命』、54頁。人民出版社、1961年初版、1973年版。
- (21) 丸山松幸「劉師培略伝初稿」によれば、この年の春に一度上海を訪れた劉師培はたちまち革命思想の虜になっている。（《人文科学紀要》第55輯、133頁。）
- (22) 天然「越界築路」、「上海経済史話 第二輯」、上海人民出版社、1963年。
- (23) 陳東原「中国婦女生活史」、326、341頁。台湾商務印書館、1977年。
- (24) 劉玉立明「清末の女子教育」、原載「中国婦女運動」、商務印書館、1934年。李又寧・張玉法主編「近代中国女權運動史料1842-1911」下冊所収。993頁、伝記文学社、1975年、台北。
- (25) 東京で発行されていた《女學報》第四期（1903年）に掲載された「記上海愛国女学校」には、「上海愛国女学校創始於去年秋間」と紹介されているが（前掲、「近代中国女權運動史料1842-1911」下冊、1007頁）、実際に授業が始まったのは1902年の12月からのようである。（高平叔編著『蔡元培年譜長編』上冊、250頁、人民教育出版社、1996年）
- (26) 前掲『蔡元培年譜長編』上冊、244頁。
- (27) 蔡元培「在愛国女学校之演説」；1917年1月15日。原載《東方雜誌》第14卷第1号、1917年1月。中国蔡元培研究会編『蔡元培全集』第三卷、12頁、浙江教育出版社、1997年。

- (28) 蔣維喬「中国教育会之回憶」；原載《東方雜誌》第33卷第1号、1936年1月。蔡建國編『蔡元培先生紀念集』、41頁、中華書局、1984年。
- (29) 蔡元培「我在教育界的經驗」；原載《宇宙風》第55、56期、1937年12月、1938年1月。前掲『蔡元培全集』第八卷、507頁。因みに、男子校たる愛国學社では軍事訓練に力を入れており、それは「暴動の種を蒔く」ためのものであった。
- (30) 蔡元培「傳略」；『蔡子民先生言行錄』、17頁、新潮社、1920年。1973年、文海出版社影印本。
- (31) 前掲「劉師培略伝初稿」、《人文科学紀要》第55輯、137～8頁。
- (32) 狭間直樹『中国社会主义の黎明』、107～112頁、岩波書店、1976年。
- (33) 前註に同じ。82頁。
- (34) 前註に同じ。115、216頁。
- (35) 絲屋寿雄『日本社会主義運動思想史』、189～90頁、法政大学出版局、1979年。
- (36) 「吳愷遺書」、《民報臨時増刊・天討》、1907年4月。「中華民國史料叢編・民報」第四冊、2085頁、中央文物供應社（台北）、1969年影印。因みに、幸徳秋水原著の中訳本「広長舌」もその名が挙げられている。
- (37) 陳東原前掲書、329頁。
- (38) 馮自由「記上海志士革命運動」、同著『革命逸史・第二集』、82頁、台湾商務印書館、1977年台湾第三版。
- (39) 馮自由「記劉光漢變節始末」、前掲『革命逸史・第二集』、227頁。同「劉光漢事略補述」、『革命逸史・第三集』、191頁、台湾商務印書館、1978年台湾第三版。
- (40) 蔡元培「劉君申叔事略」；孫常煒編『蔡元培先生全集』、674頁。台湾商務印書館、1968年初版、1977年第二版。
- (41) 坂本清馬「我親中国 その七」；雑誌《中国》、1970年3月号、87頁。「章炳麟先生、劉光漢・何震夫妻、張繼君らが、社会主義、無政府主義の研究のために、府下大久保百人町に幸徳秋水先生を訪問したのは、明治40年（1907年）の春四月頃であった。」とあり、張繼の案内であったことも記されている。
- (42) 北一輝「支那革命外史」、49頁、聖紀書房、1941年普及版。永井算巳「社会主義講習会と成聞社」によれば、張繼と幸徳との交流が始まったのは、1906年の幸徳の帰国以降という。《東洋学報》第51巻、第3号、67頁、1969年。
- (43) 張繼「回憶錄」；『張溥泉先生全集 第四編 雜著』。前掲永井論文所引による。97頁。
- (44) 景梅九「罪案」；大高巖・波多野太郎訳『留日回顧』、113～4頁、平凡社、1965年。なお、景梅九は当時25歳であり、何震・劉師培とほぼ同年代であった。景克寧・趙曉國著『景梅九評伝』（山西人民出版社、1990年）参照。
- (45) 註(36)参照。
- (46) 「幸徳秋水來函」、前掲《天義》第三期。以下、本文中で紹介した幸徳、何震それぞれの言はこれによる。
- (47) 引用は田中惣五郎「幸徳秋水」所引による。337頁。三一書房、1971年。
- (48) 村上信彦「日本の婦人問題」、131～2頁、岩波書店、1978年。
- (49) 「幸徳秋水來函」、前掲《天義》第三期。
- (50) 前掲、馮自由「記劉光漢變節始末」及び孫伯醇「ある中国人の回想」参照。
- (51) 例えば、《天義》第六期に「幸徳秋水來函、震得書後、即往訪幸徳君。」などという記述がある。
- (52) 前掲、坂本清馬「我親中国 その七」及び永井算巳「社会主義講習会と成聞社」参照。

- (53) 「女子解放問題」、《天義》第七期、第八・九・十期合冊号。前掲『辛亥革命前十年間時論選集』第二巻下冊、959～968頁。なお、西順蔵編『原典中国近代思想史 第三巻 辛亥革命』（岩波書店、1977年）所収の丸山松幸氏の翻訳を参照した。
- (54) 前註に同じ。
- (55) 前註に同じ。
- (56) 幸徳秋水「婦人解放と社会主義」；前掲《世界婦人》第16期。
- (57) 前註に同じ。
- (58) 「社会主義講習会第一次開会記事」、前掲、《天義》第六期。なお、第一回の講習会は、1907年8月31日に開催されている。引用は、前掲「我親中国 その七」所引による。
- (59) 竹内善作「明治末期における中日革命運動の交流」；《中国研究》第五号、75～6頁、1948年9月、中国研究所。なお、《天義》第八・九・十期合冊号の「社会主義（講習会）第三次開会記」には大杉の名は見えず、《天義》第十一・十二期合冊号に、大杉がバクーニンの連邦主義について第五回第六回講習会で講演したとあるだけである。あるいは社会主義講習会ではなく、別の機会であったかもしれぬが、竹内氏の第一回第二回第四回に関する記憶は正確であり、ここでは竹内氏に従う。
- (60) 安谷寛一編『未刊大杉榮遺稿』、金星堂、1928年。
- (61) 例えば、蔡元培は、「劉師培が章炳麟と鯨鯢をきたしたとき、何者かがその機に乗じて何震に働きかけ、劉師培を清朝側に走らせた」と記している（前掲「劉君申叔事略」）。なお、何震のその後の人生や彼女の女性解放論の特質については、稿を改めて紹介することとし、本稿ではこれ以上立ち入らない。
- (62) 註（59）に同じ。82頁。